『専修ビジネス・レビュー』

Vol.14 No.1 刊行のことば

専修大学商学研究所所長　川野訓志

本年も『専修ビジネス・レビュー』をお届けすることができ，喜ばしく思う。本誌を通して専修大学商学研究所の知の営みが多くの方々に触れることを望むと同時に，内外での知的交流の一助となれば，これにすぐる喜びはない。

最初にこの『専修ビジネス・レビュー』がどのように創刊されたのか，その経緯について書いておきたい。

専修大学商学研究所は1966年に設立されたが，当初『商学研究所報』という刊行物を年2回刊行し所員の研究活動内容を発信していた。その後研究所設立10年目の1976年に『商学研究年報』という年1回発行する雑誌が創刊された。『商学研究年報』ができ発信手段が増えることで，両雑誌の性格付けも明確となっていった。『商学研究所報』は所員の研究活動発信の場であり，『商学研究年報』の方は所員の研究発表の場であると共に研究所全体の刊行物という性格をもったのである。

その後，世紀が変わると，A5版サイズの『商学研究年報』では大きな図表等が入りにくく名称も大学名を取れば類似の雑誌が多く目立たないといった問題が指摘されるようになっていった。こうしたことから，サイズの大きな新しい時代にふさわしい清新なイメージの雑誌が求められたのである。そこでサイズをB5版にしたのに加え，名称を『専修ビジネス・レビュー』（略称ＳＢＲ）と変更したのである。

『専修ビジネス・レビュー』への転換は，構成にも現れている。改称前は個人研究論文がそのまま並ぶのが基本であったのが，改称後は「特集」という形で統一テーマ設定の下に一連の論文が並び，その後に「自由論題」の論文が並ぶ形式となった。また2011年刊行のVol.6 No.1からは査読制度が部分的に導入され，学術雑誌として進化を遂げてきた。

本号では，「日本における企業経営の課題」という特集を組み3本の論文を並べ，自由論題として2本，研究ノートとして1本の論文が掲載されている。どの論文もグローバル化を反映した内容となっている。

最後になったが，本誌を継続して刊行するには，本誌読者の皆様，大学関係者の皆様のご支援，ご協力が必要であった。これまでのご支援，ご協力に改めて感謝申し上げると共に，今後も引き続き，ご支援，ご協力いただきたくお願い申し上げる次第である。

（2019年1月29日）